



Title	終助詞「ね」のイントネーション
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 61-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57286
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

終助詞「ね」のイントネーション

郡 史郎

要旨 東京など首都圏中央部の日本語における終助詞「ね」のイントネーションと用法の対応関係について、合成音声の聴取実験の結果と会話資料により検討した。その結果(表2)、典型的な「ね」のイントネーションの使い方は終助詞が付かない裸の文末におけるイントネーションの使い方と共通だが、それ以外にもさまざまな使い方ができ、そこには話し手の心的状態や対人態度を反映する部分が大きいことがわかった。

1 本稿の目的

東京など首都圏中央部の日本語における終助詞「ね」のイントネーションの使い方を、合成音声の聴取実験の結果と会話資料にもとづいて記述する。ここに言う終助詞とは、通常は主節の述語または引用の従属節の述語に付いて各種のモダリティをあらわす助詞とする。

会話においてもっとも多く使われる終助詞が「ね」である。筆者なりに一言でまとめると、「ね」は話し手と聞き手との間で情報や感覚を共有したいときに使われるものであるが、細かく見ればさまざまな使い方がある。またイントネーションもさまざまである。

「ね」のイントネーションと用法の関係を検討するにあたっては、イントネーション記述の枠組みも「ね」の用法分類も、場当たりのなものではなく、整理されたものを使いたい。本稿でのイントネーション記述の枠組みは3節で述べ、「ね」の用法については4節で述べる。

2 先行研究

「ね」の用法に関する論考は数多い。イントネーションとの関係に触れたものもある。しかし、そのイントネーションの説明は場当たりのものがほとんどである。そうした中で、イントネーションの全体像を整理した上で用法との関係を記述した研究として、轟木靖子(2008)と大島デイヴィッド義和(2013)がある。その記述をまとめると次のようになる。イントネーションのラベルは次節で説明する現在の筆者のものに置き換えて示す。轟木論文は東京方言話者の内省による検討だが、大島論文はその点に関して不明である。

疑問型上昇調 轟木(2008)「確認要求をあらわす。また、動詞連用形+テについて入念な行動要求をあらわす」。大島(2013)「確認要求、承認要求」。

強調型上昇調 轟木(2008)「(聞き手が同意しているという前提で)話し手の判断を提示あるいは行動を宣言する。(動詞未然形+ウについて)行動要求の念押し・押し付けをあらわす」。大島(2013)「共有認識、照会、拒絶」。

上昇下降調 轟木(2008)「詠嘆、驚きを表明し、さらに聞き手の同意を求めることもある」。

上昇下降調・無音調 大島(2013)「共有認識+感情表明、照会+感情表明」。

ただ、両氏の研究は先に用法の整理をおこなった上でイントネーションとの対応を検討したのではなく、網羅的な聴取実験や会話資料による裏付けをとったものでもないようである。また、「ね」のイントネーションの選択を左右する要因には発話時の心的状態や対人態度も考えられるので、単純に上記のような形でイントネーションと用法が対応しているのかという疑問もある。さらに、同じイントネーション型でも高さの変化の程度はさまざまであり、そうした点と用法の関係はどうかということも未知である。本稿はこれらの点を補おうとするものである。

3 本稿のイントネーション記述の枠組み

イントネーションの記述には表1に示す6種の音声学的文末イントネーションの分類の枠組みを用いる（音韻論的には①②③④の4種類）。これはもともと終助詞類の付かない裸の文末での高さの動きの分類であるが（郡史郎 2015）、終助詞類なしの文末や文内の文節末にも適用できる。ただ、終助詞のイントネーション記述には、これに加えて助詞の音調接続形式である「順接」と「低接」の区別が必要である（郡 2003）¹⁾。ただし、「ね」は常に順接すると思われる。

表1 文末のイントネーションの型（郡 2015 を一部改変）

分類	記号	特徴	終助詞類の付かない裸の文末での主な用法
① 疑問型上昇調	↗	連続的上昇: どんどん高くする	答えを求める・反応を待つ: ワ「カ」ッ↗ター
② 強調型上昇調	↑	段状上昇: 直前より一段高く平らに言う	ぜひわからせたい気持ちを込める: 「ケ」ー↑キ・ワ「カ」ッ↑テ↑ル
②' 平坦調 強調型上昇調の変種	→	(直前より高くないが) 平らに言う	商店の接客表現としてのイ「ラ」ッシャイマ「→セー
③ 上昇下降調	↘	直前より一段高くした後で下げる	気づかせたい気持ちを込めて訴えかける: 「ハ」ヤ↑ク「（強い訴えかけ）, 「ヒ」ロ↑シ「（懸命の呼びかけ）
③' 急下降調 上昇下降調の変種	↓	文末が平板型または尾高型アクセントのために末尾拍が高い場合に、そこから下げる	気づいてわかったということを伝える: ナ「ルホド↓ー
④ 無音調	長い無音調	無記号 独自の高さの動きなし	文中の文節末での使用が多い
	短い無音調		中立的

1) || ス「ゴ」イ ム「p カシダ」ヨー || (〈あの人がその格好をしていたのは〉すごい昔だよ) という例では、「昔だ」[ム「カシダ」]の最後と同じ高さで「よ」が付いて、その高さから「よ」の内部での上昇が始まる。このように、直前の語の最後と同じ高さで付いて、そこから上昇や下降などの変化が始まるような助詞の性質を順接と言う。これに対し、|| 「マ」ダ ユ「ーガタダ」ヨ || (まだ夕方だよ) では、「夕方だ」[ユ「ーガタダ」]の最後よりも低い高さで「よ」が付いている。このように、直前の語が平板型の場合に、その最後よりも低い高さで付いて、そこから上昇や下降などの変化が始まるような助詞の性質を低接と言う。ただし、|| 「サ」ンジュ「ー || 「ニ」ダヨ || (〈第三者の年齢を聞き手が間違えて理解しているので、正しい情報を教える場面で〉32だよ)のように「よ」の前がすでにアクセントとして低い環境では、順接と低接の区別はできない。

実は、表1は郡(2015)のものと少し違う点がある。それは、④無音調のうち、母音を通常より長くする発音を長い無音調とし、長音化されない短い無音調と区別していることである。短い無音調は、特別な高さの動きもなく長く伸ばしもしない、ごくふつうの発音である。また、特徴と用法の説明も、わかりやすさと表現の一貫性の観点から少し変更している。

4 「ね」の用法

4.1 用法についての先行研究

用法の全体像をまとめた比較的最近の野田春美(2002)によれば、「ね」は「文の内容を、何かと一致させながら聞き手に示すときに用いられる。聞き手の知識や意向との一致を問う用法や、話し手自身の記憶や結論との一致を示す用法などがある」。そして、具体的な用法として、確認要求、同意要求、同意表明、行動宣言、自己確認、回想、拒絶表明の7種をあげている。また、チューシー(2008)は、間投助詞、感動詞の「ね」も含めた上で、注視要求(聞き手が情報を受け取ったか否かを問う)、同意要求、確認要求、注視表示(話し手が聞き手の情報を受け取ったことを示す)、同意表示、自己確認表示の6分類をする。日本語記述文法研究会編(2003)は、「付加された文が表す内容を、心内で確認しながら、話し手の認識として聞き手に示すという伝達機能をもっている」とし、具体的な用法として「話し手の認識を聞き手に示す用法、話し手の認識を聞き手に示すことによって聞き手に確認を求める用法、話し手が聞き手を意識していることを示すにとどまる用法の3つに大別される」とする。

4.2 返答のしかたに注目した「ね」の用法の再分類

このように「ね」の用法のまとめ方にさまざまなものがある中で、イントネーションとの対応を考えるにあたってどの考え方を採用すればよいのだろうか。どういうまとめ方をするにしても、それは分析者の判断の結果ということになるのだろうが、多少なりとも客観的な検証を経た分類があれば、それを使いたい。本稿ではその目的のために独自の手法による分類をおこない、これをイントネーションの対応との関係の検討に使うことにした。

具体的には、これまでおそらくなかった観点として、「ね」を付けて発せられた文に対して聞き手はどのような返答ができるかから「ね」の用法の整理を試みた。たとえば「君は18歳だね」とか「きょうは確か土曜日でしたね」と言われた場合は「はい、そのとおりです」や「いいえ、違います」のような返答ができる。「私、実は野菜が苦手なんですね」とか「これが当社の魅力の1つだと思いますね」と言われた場合は、「あ、そうなんですか」程度しか答えようがない。「がんばってね」と言われた場合は、「はい」とは言えても「いいえ」とは答えられない。同じ返答のしかたができる文なら、その「ね」は用法として近いであろうという想定ができる。それを手がかりに用法を整理しようというわけである。まずは筆者の内省にもとづいてその仮整理をおこなった上で、用例に対してどのような返答ができるかを複数の一般回答者にアンケート調査の形で問うことで、筆者による整理結果の客観性を検討する形をとった。

4.2.1 方法と結果

主にインターネット上で「ですね」「でしたね」「でしょうね」「ますね」「ませんね」「だね」等を検索語として用例を収集した。ついで、筆者の内省判断により、どのような返答が可能か

という観点からこれらの用例を整理した。その結果、用例を大きく5種類に分けることができた。さらに、これに対して、述語が話し手の行動や情報をあらわしているか、聞き手のそれをあらわしているか、あるいはそれ以外かという観点からの下位分類もおこなった。

次に、この仮分類の妥当性を検討するためのテスト文として、下位分類も含めた各グループから各3例程度を選び、これに野田(2002)の用例の一部を加えた以下の27文を選んだ。テスト文は、調査に使えるようにするために、生の用例から一部を削除したり発話状況を補足する等の処理をおこなった。これを近畿圏在住の大学生10名に文字を介して提示し、それを話し相手から言われたと想定したときに「正常な会話」の範囲でどのような返答ができるかを、17の答え方のそれぞれに対して「できる」「できない」「わからない」のいずれかを選ぶ形で答えてもらった。返答は、個々の文に対して可能と思われる答え方を筆者がまとめたものである。

テスト文 「(きみは)1983年生まれ。18歳だね?」「(あなたの)ご専攻は確か油絵でしたね」「きょうは確か土曜日でしたね」「(係の人らしき人に対して)受付はここですね?」「そこまでは分かりませんね」「(思いつきの中で)そこでぼくは電撃に撃たれたね」「(そういうことなら)きっとボクは営業に向いてないんでしょうね」「(私は)ぜひまたやってみたいですね」「私、実は野菜が苦手なんです」「あなたの声は独特ですね」「(あなたの)そのセーターいいですね」「(あなたの意見に対して)それとこれは違いますね」「(あなたの意見に対して)私はそう思いませんね」「(あなたはご存じないかもしれませんが)マレーシアは色んな経験が出来る場所だと思いますね」「(バスで、気づいていない人に)もうすぐ羽田に着くね」「(あなたが言うように)YouTubeの広告は確かにウザいですね」「なるほど、(あなたの)その意見はもっともですね」「あなたがおっしゃるとおりかもしれませんね」「(最近の中国事情を聞いた後で)そうですか、中国も変わったものですね」「(最近)日が伸びましたねえ」「(鬼東ちひろを知っている人どうしで)鬼東ちひろって意外に声低いですね」「この様子じゃ、あしたはたぶん雨だね」「(電話で話しているときに)あ、宅急便きたみたいだから切るね」「警察呼びますね」「救急車呼びましょうね」「次やる時は私も呼んでね」「勉強がんばってね」

返答 「1. はい、そのとおりです」「2. いいえ、違います」「3. 私はわかりません」「4. あ、そうなんですか」「5. 本当?」「6. わかりました」「7. なるほど」「8. はあ、そうでしょうか」「9. あなたもそう思いますか?」「10. そのとおりでしょ?」「11. 私もそう思います」「12. そうですね」「13. そうなんです」「14. そんなことないでしょ」「15. 了解しました」「16. どうぞ」「17. そう言われても困ります」

調査の回答から、各文についてそれぞれの返答が「できる」という判断の合計と「できない」という判断の合計を求め、統計分析ソフトRを用いて対応分析を施した。その結果として得られる17種の返答のふるまいの相互類似度を図1に示す。図の左右が対応分析の結果の第2固有値、上下が第3固有値、ドットの色と大きさが第1固有値(色は解の正負に対応)に対応する(第3固有値までの寄与率合計は78.3%)。各ドットに付した数字は上記の返答番号である。

17種の返答を第3固有値までのスコアの正負と大小にもとづいてグルーピングすると、図に示したように5群に大きく分けられる。具体的な返答内容と照らし合わせると、この5群の返答内容は、**Ⓐ**回答要求への返事(返答番号1,2,3,13)、**Ⓑ**理解・受け取りのサイン(返答番号4,7,8,14)、**Ⓒ**共感や同意に対する反応(返答番号9,10)、**Ⓓ**意見への共感や同意の表明(返答番号11,12)、**Ⓔ**話し手の意思に対する反応(返答番号6,15,16,17)とまとめることができる。個々の返答がどの群に所属するかについては筆者の内省と異なる点があるが、この5群に分かれるという点は、筆者の内省にもとづく仮分類結果の妥当性を裏づけるものである²⁾。

2) 提示文と返答の数を増やせば、分類されるカテゴリーの数が増える可能性はある。今回の結果野田(2002)

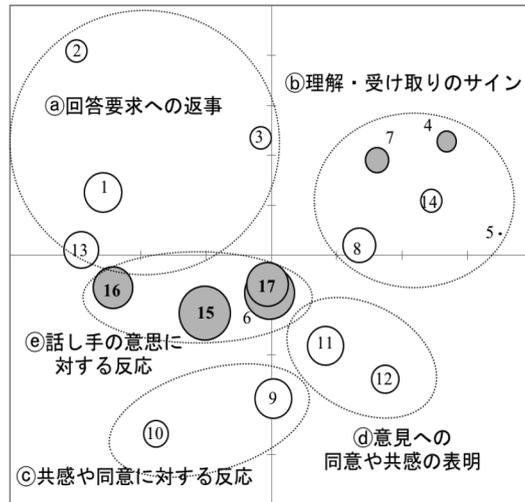


図1 返答の分類（10名の大学生による妥当性判断の対応分析結果）

この5種類の返答を引き起こす「ね」の用法としては、**㉑確認の要求**（自分が思っている内容が正しいかどうか確認の答えを求める）、**㉒認識の要求**（自分が思っている内容をしっかり知ってほしいことをあらわす）、**㉓共感・同意の表明**（相手の気持ちに共感や同意をする）、**㉔共感・同意の要求**（自分の気持ちに対して共感や同意を求める）、**㉕行動の承認要求**（自分の行動意図や相手とすべき行動について承認を求める）のようにラベル付けできる。本稿でのイントネーションと用法の関係の検討にあたっては、この分類を利用する。

4.2.2 本稿の「ね」の分類と用例、先行研究との対応関係

返答のしかたの相互類似度にもとづく「ね」の用法の分類結果を、上述の対応分析の結果にもとづいて、それぞれにあてはまると判断された提示文を中心にした例とともに示す（提示文の相互類似度の図は省略）。

㉑確認の要求（自分が思っている内容が正しいかどうか確認の答えを求める）

先行分類との対応： 野田(2002)・チューシー(2008)の「確認要求」

・相手に関する話者の認識についての確認

例 「(きみは) 1983年生まれ。18歳だね?(野田 2002)」「(あなたの) ご専攻は確か油絵でしたね」

返答 「はい、そのとおりです」「いいえ、違います」「そうなんです」

・相手以外に関する話者の認識についての確認

例 「きょうは確か土曜日でしたね」「(係の人らしき人に対して) 受付はここですね」「(そういうことなら) きっとボクは営業に向いてないんでしょうね」

返答 「はい、そのとおりです」「いいえ、違います」「私はわかりません」

㉒認識の要求（自分が思っている内容をしっかり知ってほしい）

先行分類との対応： 野田(2002)の「拒絶表明」「自己確認」「回想」、チューシー(2008)の「注視

やチューシー(2008)の分類を簡素化したものになっている。

要求」「注視表示」「自己確認表示」

・話し手自身に関する認識について

例 「嫌だね(野田 2002)」「そこまでは分かりませんね(野田 2002)」「(思い出話の中で)そこでぼくは電撃に撃たれたね(野田 2002)」「私、実は野菜が苦手なんです」「(今思えば)私は単なる同僚だったんですね」「喉の痛みは大分ましですね」「(私は)ぜひまたやってみたいですね」

返答 「あ、そうなんですか」「なるほど」

・聞き手にかかわる事態に関する認識について

例 「あなたの声は独特ですね」

返答 「あ、そうなんですか」「はあ、そうでしょうか」「そんなことないでしょ」

・聞き手の発言内容に関する認識について

例 「(あなたの意見に対して)それとこれは違いますね」「(あなたの意見に対して)私はそう思いませんね」

返答 「あ、そうなんですか」「そんなことないでしょ」

・それ以外の事態に関する認識について

例 「(あなたはご存じないかもしれませんが)マレーシアは色々な経験が出来る場所だと思いますね」「これが当社の魅力の1つだと思いますね」「(バスで、気づいていない人に)もうすぐ羽田に着くね」「(最近)日が伸びましたねえ(野田 2002, ただし同意要求とされている)」「(鬼東ちひろを知っている人どうしで)鬼東ちひろって意外に声低いですね」「この様子じゃ、あしたはたぶん雨だね」

返答 「あ、そうなんですか」「そんなことないでしょ」

◎共感・同意の表明(相手の気持ちに共感や同意をする)

先行分類との対応: 野田春美(2002)の「同意表明」、チューシー(2008)の「同意表示」「注視表示」

例 「(あなたが言うように)YouTubeの広告は確かにウザいですね」「(最近の中国事情を聞いた後)そうですか、中国も変わったもんです」「なるほど、(あなたの)その意見はもっともですね」

返答 返答をさらにするとすれば、「あなたもそう思いますか?」「そのとおりでしょ?」

◎共感・同意の要求(自分の気持ちに対して共感や同意を求める)

先行分類との対応: 野田(2002)の「同意要求」、チューシー(2008)の「同意要求」「注視要求」

例 「きょうは寒いですね」「(あなたの)そのセーターいいですね」「あなたがおっしゃるとおりかもしれませんね」

返答 「私もそう思います」「そうですよね」

◎行動の承認要求(自分の行動意図や相手がとるべき行動について承認を求める)

先行分類との対応: 野田(2002)の「行動宣言」、チューシー(2008)の「注視要求」

・話し手自身の行動について

例 「(電話で)あ、宅急便きたみたいだから切るね(野田 2002)」「警察呼びますね」「救急車呼びましょうね」

返答 「わかりました」「了解しました」「どうぞ」「そう言われても困ります」

・聞き手の行動について

例 「次やる時は私も呼んでね」「勉強がんばってね」

返答 「わかりました」「了解しました」

5 終助詞「ね」のイントネーション：合成音声の聴取実験による検討

前節に示した「ね」の5つの用法のそれぞれに対して、どのようなイントネーションがふさわしいと感じられるかを合成音声の聴取実験により調査した。2節の最後で述べたように、「ね」のイントネーションの選択を左右する要因としては、用法だけでなく発話時の心的状態や対人態度も考えられる。また、同じイントネーション型でも高さの変化の程度や母音の長さにも注目する必要がある。本聴取実験の設問と提示音声はこれらの点を考慮して作成した。

また、本聴取実験では、回答のしかたとして、ひとつの「ね」の用法に対してどの音声がふさわしいかを選ばせる方法をとらず、提示した用法のそれぞれに対して各音声がふさわしいかどうかを聞く方法をとった。前者の方法は、その用法に対してふさわしいイントネーションが1種類しかない場合はよいが、複数ある場合には妥当ではない。

調査は一次調査と補足調査からなる。テスト文は「ね」の直前の語（先行形式）にアクセントによる下がり目がない文を主として使うが、これは音調の接続形式が順接か低接であるのかを知るためである。実験に使用したテスト文と設問は、回答とともに5.2節に示す。

5.1 合成音声と聴取実験の方法

5.2節に示すテスト文について、「ね」の高さの動きと程度、母音の長さが異なる複数の合成音声を用意し、これを首都圏生育の回答者に聞かせて、指示した意図での言い方の感じがあるかどうかを、「全然しない」「ほとんどしない」「するともしないとも言えない」「少しする」「強くする」の5段階でたずねた。

用意した音声（図2に「場所はこちらだね」を例として示す）は各テスト文につき20種（一次調査）または5～10種（補足調査）である。具体的には、[1]順接の無音調と平坦調（先行形式にアクセント下降がないテスト文では無音調と平坦調は同じ音形になり、音声としては区別できない；両者の区別ができるのは先行形式にアクセントの下がり目があるテスト文のみ）、[2]低接の無音調、[3]順接の疑問型上昇調、[4]低接の疑問型上昇調、[5]順接の強調型上昇調、[6]順接の上昇下降調、[7]順接の急下降調である。疑問型上昇調、強調型上昇調と上昇下降調については上昇量として3段階を設定した。「ね」の接続形式は順接と思われるが（轟木 2008）、仮に低接の強調型上昇調と上昇下降調が存在するとしても使用頻度が少ないと思われたので、実験規模を大きくしないためにここでは本格的にはとりあげなかった。補足調査は一次調査の結果にもとづいてさらに詳しく知りたい点の検討を目的としたものである。そのため、補足調査では仮説の検証に必要なものを中心として残しつつも、検討対象としての重要度が低いと思われるものは削除し、提示する音調の数を減らした。「ね」区間の音形は設問(4)のテスト文を除き直線的な変化とした。

母音の長さは、無音調または平坦調と強調型上昇調については母音が130 msで聴覚的には1モーラ相当の短めのものと、260 msで聴覚的には2モーラ相当のもの2種とし、疑問型上昇調と上昇下降調は260 msのみとした。ただし設問(4)のテスト文では215 msの1種のみである。

音声は、八王子市生育の30歳台の女性話者、または茅ヶ崎市生育の40歳台の女性話者の発音による原音声をもとに音声処理ソフトPraatを使って作成したPSOLA合成音である。

一次調査の回答者は東京旧市内から30 km程度の圏内で主に生育した30歳代までの大学生・大学院生20名と社会人6名、計26名（男11、女15）である。補足調査の方は、同じく大

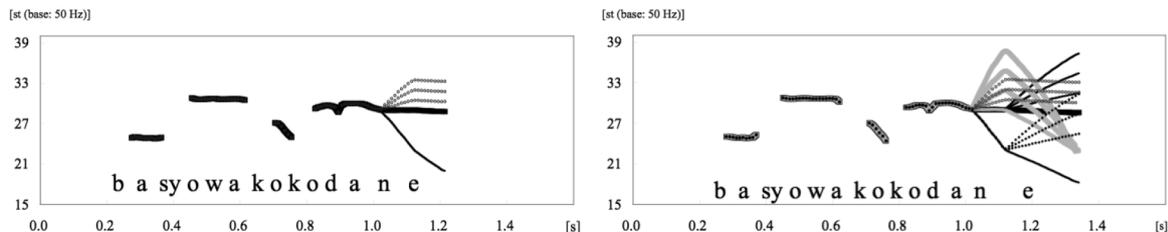


図2 聴取実験で使った音声の音形： テスト文「場所はここだね」の場合

学生・大学院生 16 名と社会人 6 名，計 22 名（男 9，女 13）である。調査時期が違うため，一次調査と補足調査で共通の回答者は 14 名である。補足調査の一部では 6 名のものもある。ひとつの音声は 1.5 秒間隔で 2 回続けて提示され，その後に置いた 2.5 秒の無音区間で回答を求めた。一次調査では提示順は 1 種類のランダムな順序で 18 名に，そしてその逆順で 8 名に提示した。音声は CD に記録されたものを個別にヘッドセットで聴取しながら回答用紙に回答を記入した。補足調査の方は提示順は 1 種類（ランダム）で，WEB ページに上に配置した音声をインターネットを経由してヘッドセットで聴取し，回答も WEB ページから送信した。

5.2 テスト文，設問の内容，設問の意図，聴取実験の結果

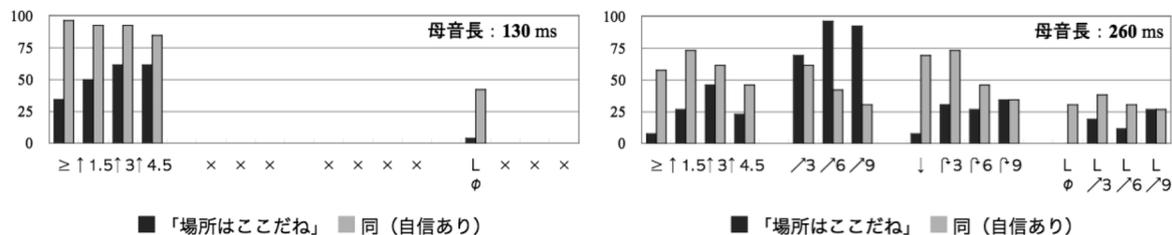
一次調査と補足調査の結果をまとめて示す。結果は，各設問に対して，その感じが「少しする」および「強くする」という肯定的な回答が得られた割合を百分率であらわす。各図の横軸に×印がある音調は，その音調を当該の設問に対して提示していないことを示す。イントネーションの記号は表 1 のもの。ただし， ϕ は無音調， \geq は先行形式にアクセントの下降がないため無音調でもあり平坦調でもあることを示す。数字は「ね」冒頭からの上昇量（単位は半音，ただし全体に 2.5 半音/s の下降傾斜をかけているので，実際にはこれより 0.5 半音ないし 0.8 半音程度小さい），L は低接することを示す。

①「確認の要求」についての調査

●テスト文 「場所はここだね」（先行形式にアクセント下降なし）（回答者 26 名）

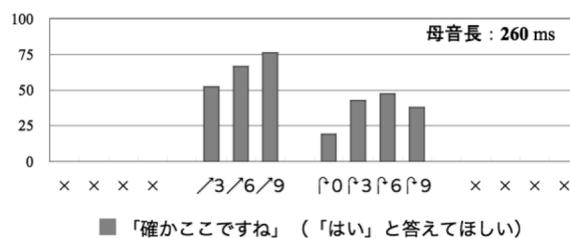
設問(1)「はい・いいえ」の返事がほしいと感じられるか

設問(2)自信がありながらも聞いていると感じられるか【真偽を確認したい命題についての発話者の認識の程度との関連を問う】

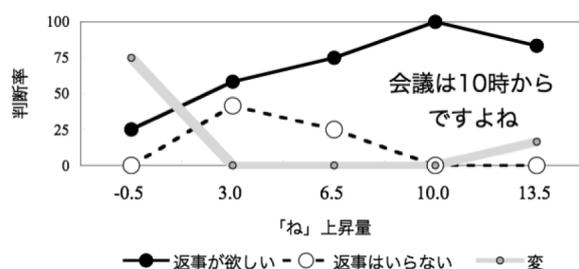
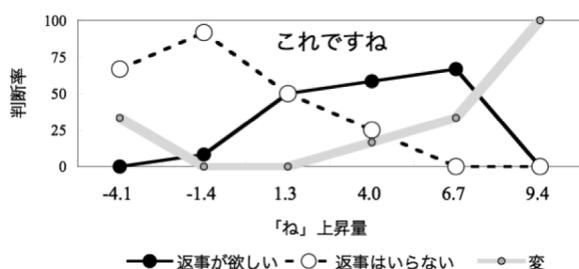


●テスト文 「確かここですね」（先行形式にアクセント下降あり）（回答者 22 名）

設問(3)『「いいえ」ではなく『はい』と答えてほしい感じ』がするか【肯定的な回答を期待する程度との関連を問う】（なお， $\uparrow 0$ で示した音形は冒頭部は平坦で途中から下降するもの）

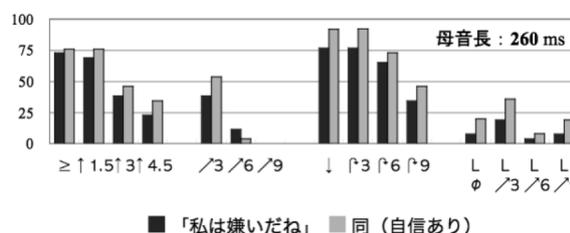


●テスト文 「これですね」「会議は10時からですよね」（先行形式にアクセント下降あり）（6名）
 設問(4)『「はい・いいえ」の返事が欲しい』言い方か、そうした返事はいらぬか、「変」か。【上昇下降調と無音調の音声のみを提示し上昇下降調が確認要求になるかを問う。横軸の数値は「ね」の始点からの実際の上昇量（半音値）。負値のものは無音調。音形は藤崎モデルを利用した非線形のもの。】

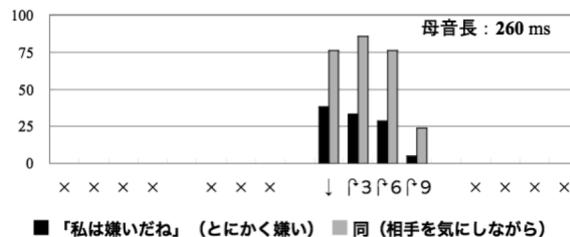
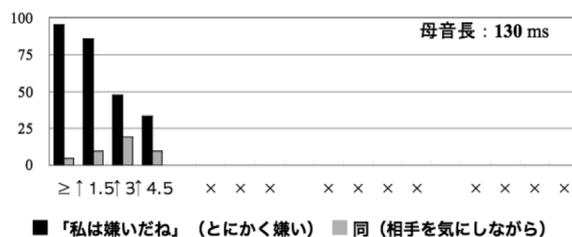


⑥「認識の要求」についての調査

●テスト文 「(そのやり方は) 私は嫌いだね」（先行形式にアクセント下降なし）（26名）
 設問(5)「そうなんですか・わかりました」と返事をしてほしいと感じられるか
 設問(6) 自信を持って言っていると感じられるか【聞き手に認識をさせたい命題についての発話者の認識の程度との関連を問う】



●テスト文 「(そのやり方は) 私は嫌いだね」（先行形式にアクセント下降なし）（22名）
 設問(7)「何が何でも、とにかく私は嫌い」と有無を言わせぬ感じで言っているように聞こえるか
 設問(8)「悪いけど、私は嫌い」のように相手のことを気にしながら言っているように聞こえるか
 【どちらも対人態度との関連を問う】

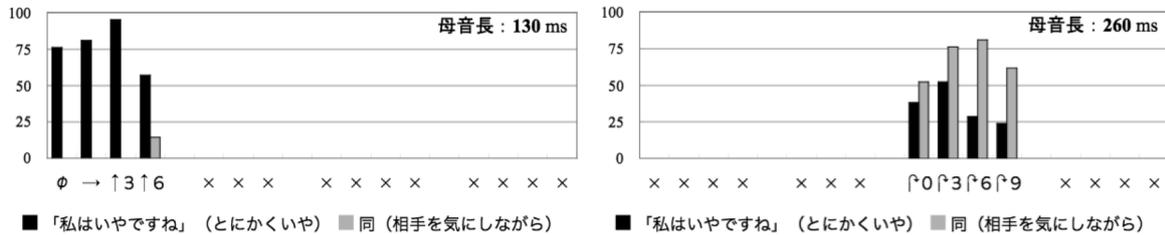


●テスト文 「私はいやですね」(先行形式にアクセント下降あり)(22名)

設問(9)「何が何でも、とにかく私は嫌い」と有無を言わせない感じで言っているように聞こえるか
 設問(10)「悪いけど、私は嫌い」のように相手のことを気にしながら言っているように聞こえるか

【上のテスト文と同じだが、「ね」の先行形式にアクセント下降があるかないかの違い】

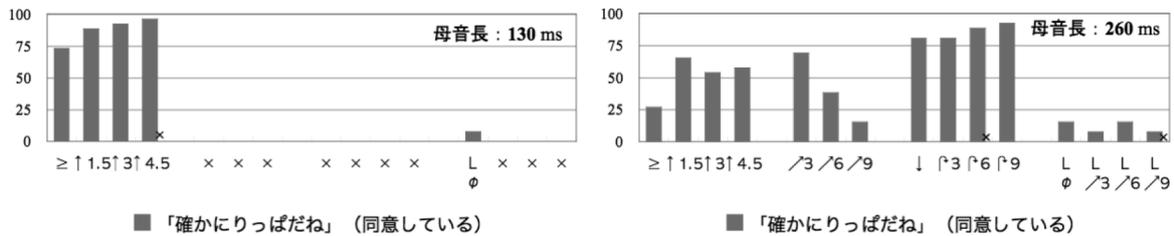
(↑0で示した音形は冒頭部は平坦で途中から下降するもの)



㉔「共感・同意の表明」についての調査

●テスト文 「確かにりっぱだね」(先行形式にアクセント下降なし)(26名)

設問(11) 相手の意見に同意して言っているように感じられるか

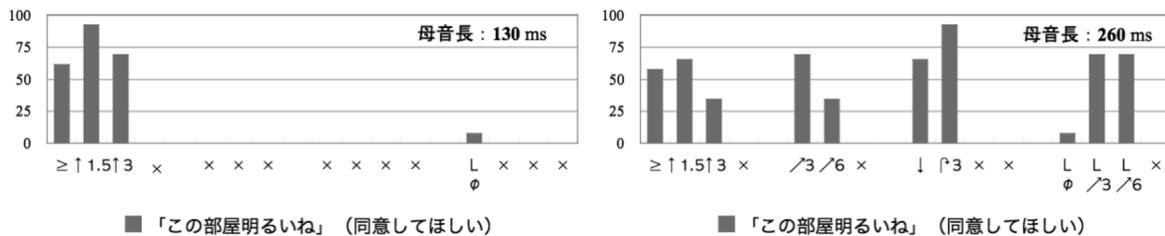


㉔「共感・同意の要求」についての調査

●テスト文 「この部屋明るいね」(先行形式にアクセント下降は伝統的にはないが、新形ではあり:)

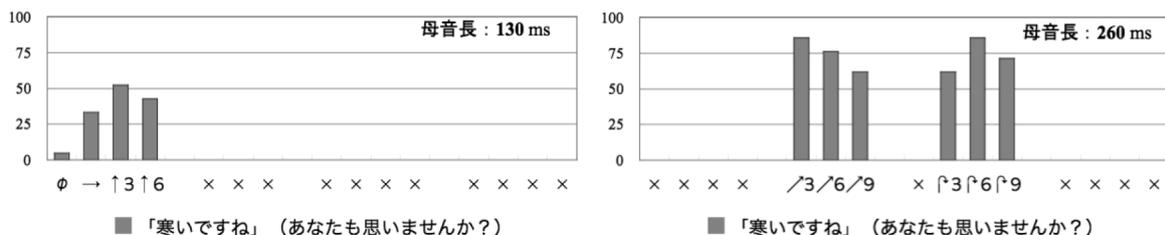
ここではアクセント下降はないものとして高さの動きを設定)(26名)

設問(12)「確かにそうです」「そうでしょ」と返事してほしいと感じられるか



●テスト文 「寒いですね」(先行形式にアクセント下降あり)(22名)

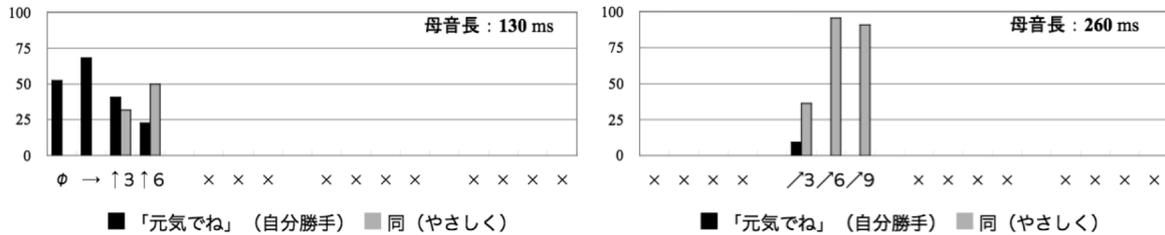
設問(13)「あなたも寒いと思いませんか」と聞かれているように感じるか【上と設問法が異なる】



⑨ 「行動の承認要求」についての調査

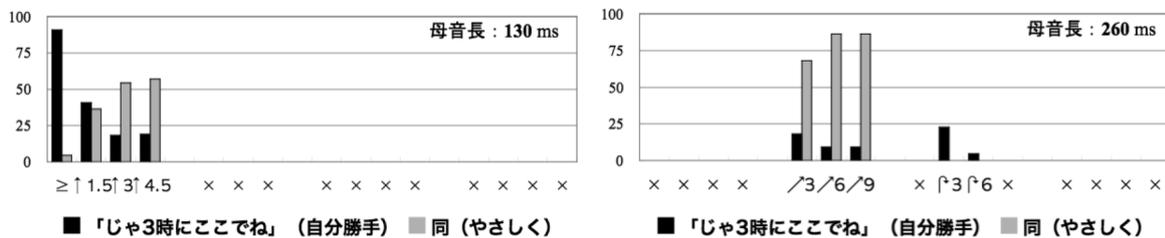
●テスト文 「元気でね」(先行形式にアクセント下降なし)(22名)

設問(14) やさしく念を押している感じがするか,それとも相手の気分や都合を考えないで自分勝手に言っている感じがするか【対人態度との関連を問う】



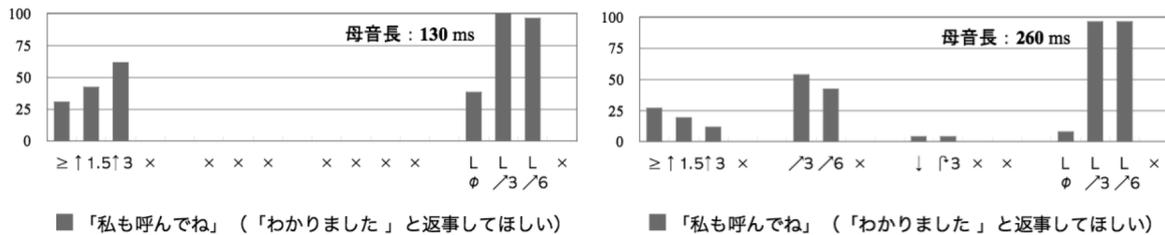
●テスト文 「じゃ3時にここでね」(先行形式にアクセント下降なし)(22名)

設問(15) やさしく念を押している感じがするか,それとも相手の気分や都合を考えないで自分勝手にいる感じがするか【対人態度との関連を問う】



●テスト文 「私も呼んでね」(先行形式にアクセント下降はないが,尾高型と見るべき)(26名)

設問(16) 「はい,わかりました」とか「はい,わかってます」という返事をしてほしい感じがするか【動詞テ形には「ね」は低く付くのが基本であることを確認するためのテスト文】



5.3 聴取実験の結果のまとめ

高い評価が得られたイントネーションと用法の組み合わせを表2にまとめた(○印)。高い評価は得られなかったが6.3節で見る会話資料に使用例があるものもここに書き込んでおいた。

表2の聴取実験結果のまとめから言えるのは,イントネーションと用法の関係は轟木(2008)や大島(2013)による記述(筆者の判断による振り分け結果を表2に●印で示す)とは矛盾しないが,同じイントネーションがそれ以外の用法に対してもふさわしいと判断されていることである。

先行研究の記述を本稿の記述の枠組みでとらえ直すと,確認の要求は疑問型上昇調,認識の要求は強調型上昇調,共感・同意の表明と共感・同意の要求は上昇下降調ということであり,結局これは裸の文末でのイントネーションの使い方と同じである。しかし,実際にはそのよう

表 2 終助詞「ね」の表現機能とイントネーションの関係

イントネーション 用法	【順接】 疑問型上昇調	【順接】 強調型上昇調 と平坦調	【順接】 上昇下降調 と急下降調	【順接】 無音調
㊤確認の要求（自分が思っている内容が正しいか確認の答えを求める）	○● 上昇：中～大	○短 自信あり	○ 上昇：小 自信あり	
㊦認識の要求（自分が思っている内容をしっかり知ってほしい）	(会話例にあり)	○●短 上昇：小 押しつけ	○ 上昇：小～中 相手を気にしながら	○短 押しつけ
㊧共感・同意の表明（相手の気持ちに共感や同意をする）		○短	○●	(会話資料にあり)
㊨共感・同意の要求（自分の気持ちに対して共感や同意を求める）	○ 上昇：小	○短	○●	
㊩行動の承認要求（自分の行動意図や相手がとるべき行動について承認を求める）	○● 上昇：中～大 やさしく	○●短 上昇：小 押しつけ		

なすっきりした形でイントネーションの使い方が決まっているわけではないということになる。

「ね」のイントネーションの違いは、確認を求める場合でも自信が一応あって念のために聞いているのかどうか、認識を求める場合でも押しつけ気味に言うか、相手の気持ちを気にしながら言うか、あるいは自分の行動を宣言したり相手の行動について指図する場合に、やさしく言うか、自分勝手に押しつけ気味に言うかといった違いにも対応している。つまり、「ね」のイントネーションは話し手の心的状態や対人態度の違いをもあらわしているわけである。

今回の調査はどのイントネーションが「ね」のそれぞれの用法に典型的かを調べたものではない。今回の調査結果を踏まえると、先行研究の記述は「ね」のイントネーションの典型的な使い方を示したものであって、実際にはそれ以外の使い方があり、イントネーションの使い分けには話し手の心的状態や対人態度の違いを反映する部分も大きいと理解すればよいものと思われる。

6 会話資料による確認

合成音声の聴取実験の結果は、実際の会話でも確認できる。つまり、同じ用法の「ね」であってもさまざまなイントネーションが使われることが会話資料からも確認される。

6.1 会話資料

以下の10種の資料（異なり話者数は14名）から約12分ずつの会話区間、計120分を選んだ。
 ①～⑦テレビ朝日のトーク番組『徹子の部屋』から、首都圏中心部成育の幅広い年齢層をゲストとする7放送回分。ホストは黒柳徹子氏（1933, 1989～2014）、ゲストは、①黒田初子（1903, 1994）、②中村メイコ（1934, 1989）、③忌野清志郎（1951, 2002）、④野村宏伸（1965, 1989）、⑤相田翔子（1970, 2005）、⑥大野智（1980, 2014）、⑦堀北真希（1988, 2013）の各氏（括弧内は西暦での生年と放送年）。会話の内容は、出演したテレビドラマや映画に関する話、子供のころや若いころの逸話、家族の話など。
 ⑧国立国語研究所(2002)『全国方言談話データベース 日本ふるさとことば集成 第6巻 東京・神奈川』に収められた東京下町方言話者で生年1911と1907の男女による会話（分析対象部は昔の年末の行事が

話題)。1980年収録。話者は親しい知人どうしと思われる。

⑨生年1972で世田谷区成育と横浜市成育の女性で親しい友人どうしによる独自収録の会話(分析対象部は複数のテレビドラマの内容や俳優についての雑談的内容)。2009年収録。

⑩生年1986の市川市成育の男性と生年1987の府中市成育の女性で親しい友人どうしによる独自収録の会話(分析対象はクイズ本を見ながら川渡り問題などを共同で解く場面)。2008年収録。

本資料には終助詞類(終助詞的な「じゃない」「でしょう」およびその変異形を含む)が1139例、うち「ね」が496例あるが、そのイントネーションの音声学的な型を上昇量、末尾母音の長音化の有無とともに記録した。イントネーションは音声処理アプリケーションPraatのSoundEditor画面上でのピッチの表示と狭帯域スペクトログラムの視察、および聴覚判断を併用しておこなった。母音の長短とポーズの有無の判断は聴覚による。

6.2 会話資料に見られる文末・文節末のイントネーションの全般的傾向と「ね」の位置づけ

まず、この資料に見られる文末・文節末のイントネーションの全般的傾向を表3と図3にまとめておく。表4は「ね」のイントネーション型の出現頻度を示す。終助詞が付かない裸の文末では短い無音調が圧倒的に多く(81%)、疑問型上昇調がそれに次ぐが(11%)、「ね」の場合は無音調は少なく(6%)、多いのは強調型上昇調(56%)と上昇下降調(29%)である。このことだけから

表3 120分の会話資料における文末・文節末のイントネーションの各型の使用回数

	疑問型 上昇調	強調型 上昇調	平坦調	上昇 下降調	急 下降調	長い 無音調	短い 無音調	不明瞭	合計
文末(終助詞なし)	80	18	0	1	9	24	575	0	707
文末(終助詞類付き)	127	412	24	181	4	41	323	27	1139
文中の文節末(間投助詞なし)	14	132	10	350	12	392	6866	0	7776
文中の文節末(間投助詞付き)	25	172	2	159	24	5	9	2	398
合計	246	734	36	691	49	462	7773	29	10020

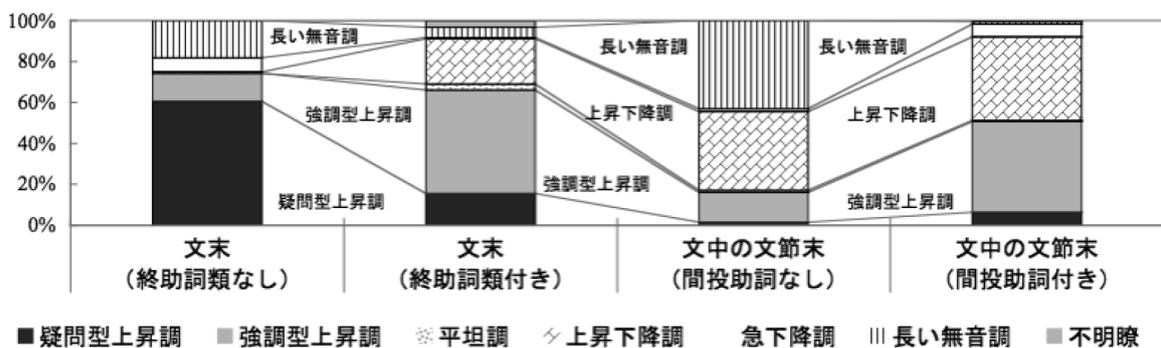


図3 120分の会話資料におけるイントネーションの使用状況(短い無音調以外の中での割合)

表4 120分の会話資料における終助詞「ね」のイントネーション：各型の使用回数合計

疑問型 上昇調	強調型 上昇調	平坦調	上昇 下降調	急 下降調	長い 無音調	短い 無音調	不明瞭	合計
17 (3%)	277 (56%)	16 (3%)	142 (29%)	0	3 (1%)	27 (5%)	14	496

も、「ね」には、裸の文末でのイントネーションとは相当違う使い方があることが確認される。

6.3 イントネーション別に見る会話資料の「ね」の用法と用例

以下に示す用例には、前節で説明した会話資料にあらわれたものだけでなく（資料の番号と話者の生年と性別を括弧内に示す）、日常的な観察で得られたものも加えている。提示には表音カナを用い、イントネーションの記号は高さ変化の開始点にもっとも近いところに付ける。アクセントに伴う高さ変化は「（上昇），」（下降）であらわす。「の後に p または f を付けて、上昇がその前の高さの動きに比べて相対的に小さいこと(p), または上昇が大ききこと(f)をあらわす。|| はイントネーション句のくぎり、/ はポーズや言い直し等のための短い途切れである。

6.3.1 疑問型上昇調（順接）

㊤確認の要求（上昇量は中か大）

例 || 「キ[↑]ヨシッテ ユーノワ || ゴ[↑]ホ[↑]ンミョーナンデス / f **ネー** || (㊤1933f: きよしっていうのはご本名なんですね: 応答は [「ハ[↑]イ

㊦認識の要求（聴取実験結果では高評価は得られていないが、会話例にはある）

例 || ア[↑]タシ || ア[↑]レデ ハジ[↑]メテ 「p ミ[↑]タノ / **ネー** || (㊦1972f: 私あれで〈あの番組でそれを〉初めて見たのね: 応答は [アッ 「ソ[↑]ーナンダ

㊧共感・同意の要求（上昇量は小）

例 || アツ[↑]カッタデス / p **ネ** || (㊧1933f: 〈前回会ったときは〉暑かったですね; 応答は [|| ア[↑]ツ[↑]カッタデス || ア[↑]ン ト[↑]キワ || 「ト[↑]ニカク ||]) (強い気持ちが入りアクセント下降が消失)

㊨行動の承認要求： 自分や相手の行動についてやさしく承認を求める（上昇量は中か大）

例 || 「ジャ[↑]ー || 「サ[↑]ンジニ**ネ** / **ー** || (じゃあ3時にね; すでに合意ができていたことの再確認)

6.3.2 強調型上昇調と平坦調（順接）

「ね」のイントネーションでいちばん多いのはこの強調型上昇調である。

㊩確認の要求： 自信はあるが、念のために確認の答えを求める

例 || 「ニ[↑]ホン モ p[↑]タ[↑]ナキヤ イ[↑]p[↑]ケナイッテ コト[↑]ダ[↑]**ネ** || (㊩1987f: 〈クイズの答えをまとめると、ひもを〉2本持たなきゃいけないってことだね; 応答は [「ン[↑]ー] (うん))

|| ロ[↑]クジュ[↑]ッサイ「p[↑]カ[↑]ラ || フ[↑]ランスゴオ オハジメニナ[↑]ッタンデス[↑] f **ネ** || (㊩1933f: 〈事前に聞いていたが、あなたは〉60歳からフランス語をお始めになったんですね; 応答は、もっと以前からやっていたが、学校に入ったのがそのころという内容)

㊪認識の要求： わかってほしい気持ちを押しつけ気味に込める（上昇量は小）

例 || ウ[↑]レシ[↑]カッタデス[↑] p **ネ** || (㊪1988f: うれしかったですね; 応答は [「ソ[↑]ーデショー[↑] p **ネ**])

|| ナ[↑]ツカシ[↑]ートワ オ[↑]p[↑]モイマセ[↑]ン[↑] p **ネ** || (㊪1933f: なつかしいとは思いませんね; 応答は [|| 「ア[↑]ー || 「ホントデ[↑]ス→カ

|| 「デ[↑]モ || ア[↑]ナ[↑]タ || オ[↑]f[↑]シアワセデ[↑]ス[↑] **ネ** || (㊪1933f: 〈今聞いた話を総合すると〉あなたはお幸せですね; 応答は [「ソ[↑]ーデス[↑] f **ネ**])

㉔共感・同意の表明

- 例 || ソ「リヤ ヨ「カッタデス↑ネー || (④1933f: そりゃよかったですね; 直接の応答なし)
|| 「モ「ー || 「ソ「デス→ネー || (⑤1970f: 〈カラオケが好きなんだってと確認を求められて〉も
う, そうですね; これは平坦調の例【図4】; これに対する直接の応答なし)

㉕共感・同意の要求

- 例 || ズ「イ「ブン「p「ジューヨーデ「ス↑ネー オ「p「シヨクジ || (①1933f: 〈食事をすると平和な
気分になれるという話を聞いて〉ずいぶん重要ですね, お食事; 応答は [|| 「ソ「デス↑f「ネー ||])

㉖行動の承認要求: 押しつけるように宣言・指図する (上昇量は小)

- 例 || 「ゲ「ンキデ↑p「ネ || (元気でね)
|| 「ジャ「→ネー || (〈別れや電話を切る際の〉じゃあね: 平坦調の例; 応答は [「ジャ「→ネー]
や [「バイ「→バーイ] など)³⁾

6.3.3 上昇下降調と急下降調 (順接)

㉗確認の要求: 自信はあるが, 念のために確認の答えを求める (上昇量は小)

- 例 || ア「レ「モー || / || 「ニ「セ「ン || ジュ「ーイチ「ネンデス↑p「ネー || (⑥1980m: あれ〈あ
の出来事は〉もう 2011 年ですね; 応答は [「ソ「デス「p「ソ「デ↑ス。])

㉘認識の要求: 自分の気持ちをわかってほしいが相手の気持ちも気になる (上昇量は小か中)

- 例 || 「ド「ーシテナンダローツテ || / || オ「モ「ッタンデショー↑p「ネー || (③1933f: どうし
てなんだろうって思ったんでしょうね; 応答は低く無音調の [「ネー])

㉙共感・同意の表明

この用法は上昇下降調とともに使われることが多いものである。

- 例 || 「ソ「デショー↑p「ネー || (④1965m: そうでしょうね; 直接の応答なし)
|| ア「レ || 「ヒ「ド「イデス↑p「ネー || (⑥1980m: あれひどいですね; 直接の応答なし)
|| 「ナ「カ「p「イ「デス↑p「ネー / ヒ「p「ジョーニ || (⑥1980m: 仲いいですね, 非常に; 家族
の仲がいいと聞いているがと言われて, 答えとして; これに対する直接の応答なし)
|| 「ホン「トニ↑p「ネー || (⑧1907f: ほんとにね; 直接の応答なし)
|| ソ「レワ「タイヘンダ↑p「ネー || (⑧1911m: それは大変だね; 応答は [タ「イーヘンナ「ンデス
ヨ↑f「ネー] で, 共感しあっている)

㉚共感・同意の要求

- 例 || オ「ヒサシブリデ「ス↑p「ネー || (⑥1933f: お久しぶりですね; 応答は [「ハ「イ])
|| 「サ「イゴノ || / || マー「イ「チンチ「ワ || ス「ゴ「カッタデショーカラ↑p「ネー ||
(③1933f: 最後の一日はすごかったでしょうからね; ; 応答は [|| 「ネー「ソ「デス↑p「ネー ||])

3) ジャからネへの下降は「じゃあ」「ジャー」の本来のアクセント下降が残ったものと解される。「ね」の接続形式は順接。ただ, 下がり方は少ない。これはネをあまりに低く言うと不満感が感じられるためか。

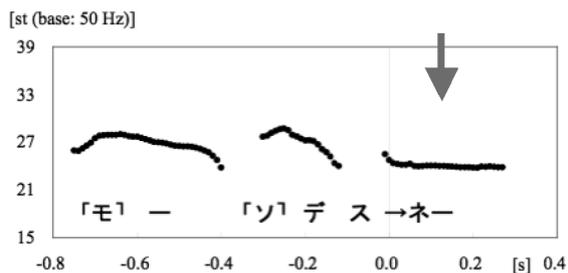


図4 「もう、そうですね」(平坦調)

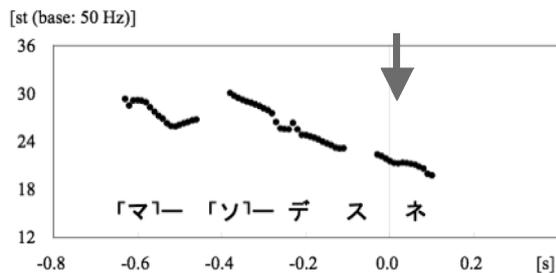


図5 「まあそうですね」(無音調)

6.3.4 無音調 (順接)

「ね」は順接の短い無音調をとることがある⁴⁾。下の会話例の1例目は認識の要求, 2例目は共感・同意の表明の用法に分類できるものである。図5に示すのはこの2例めの無音調の「そうですね」で, 図4は6.3.2節の㉔に示した平坦調の「そうですね」で, 別の話し手の発音であるが, 図5の無音調の方はネの中で少し下がっていくのに対して, 図4の平坦調ではそうした緩やかな下降に逆らう形でほぼ平らになっていることがわかる。

例 || 「チューガッッコ || イ「チネン || 「ト」キ / ↑デ || 「オ」ワリマ「シタネ / 「p ソーユ ケ
ガッワ || (⑥1980m: 中学校一年のときで終わりましたね, そういうけがは; 応答 [アッ「ソ」ーナノ])
|| 「マ」ー || 「ソ」ーデスネ || (⑦1988f: <畑のまんなかでスカウトされたんだってという問いかけに対して> まあそうですね; 直接の応答なし【図5】)

謝辞

聴取実験用の原音声の話者の方々, 回答者の方々, 回答者の紹介者の方々, そして会話資料の話者の方々に感謝申し上げます。

引用文献

- 大島デイヴィッド義和(2013)「日本語におけるイントネーション型と終助詞機能の相関について」『国際開発研究フォーラム』43, 47-63.
 郡史郎(2015)「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』(大阪大学大学院言語文化研究科)41, 85-107.
 チューシー, アサダーユット(2008)「独話における助詞『ネ』の伝達機能」『日本語文法』8(2), 156-172.
 轟木靖子(2008)「東京語の終助詞の音調と機能の対応について—内省による考察—」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会)5-28.
 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版。
 野田春美(2002)「終助詞の機能」『新日本語文法選書4 モダリティ』261-288, くろしお出版。

4) 首都圏の若年層22名に対する聴取実験(補足調査)で, アクセントが下降ある4つの先行形式に付く短い無音調(「ね」内部で約3.5半音下降)での言い方があるかどうかのみを問うたところ, 「きょうは寒いですね」「確かここですね」「私はいやですね」「元気ですね」に対して肯定的な回答はそれぞれ95%, 76%, 48%, 10%だった。「承認の要求」には短い無音調はふさわしくないようである。